

(3) 横浜港

いよいよ神戸港出航の日だ。いつも通りの朝食を終え、パントリーで食器を洗っていると、「サロン、コーヒー五つ。」サロンルームからチョッサーの声がかかった。トレイにコーヒーを乗せて持って行くと、ものものしい制服を着た税関員3名がサロンルームで何やら難しそうな書類をチェックしている。

チョッサーとパーサーが十分ぐらいの間、彼らの質問に答えていた。そして彼らが立ち去ると同時にチョッサーは入出港時の持ち場である表^{おもて}の方に走って行った。

ここで大まかなチョッサーの仕事を説明すると、いつもの4～8時のワッチの他に本船側の荷役の総責任者であり、本船の入出港時においては、表、ホックス(FORE CASTLE=最前部甲板)に立って、接岸又は離岸する際の表^{おもて}の指揮を執ったり、またある時は、沖にあるブイ(Buoy=係船する為のブイ)にアンカーチェーン(Anchor Chain=アンカーを繋いでいるチェーン)を繋^{つな}いだり、外したりする際の表^{おもて}の指揮を執ったりもする。

さあ、次は横浜である。本船はゆっくりと神戸港を離れていく。神戸港がだんだんと本船から遠ざかって行く時、なんだかしんみりして愛おしさが湧いてくる。

本船は淡路島と紀伊半島の間の紀伊水道を超え太平洋に出た。確かに外海^{そとうみ}に出ても海は凪いでいて太平洋は晴れ渡っている。

本船の航海速度は14.5ノット、時速で言えば約27キロぐらいである。パントリーから外に出て久しぶりに両手を広げて伸びをした。空気もおいしいし、四月の空とは思えない位に真っ青な空と、島一つ見えない水平線、初めての経験である。

「おいサロン、アッシュ・バケツをレッコしろ。」主調事が言うので仕方なくドラム缶の下に繋^{つな}がれたワイヤーを持ち上げようとしたら、「こらー、ちんたらちんたらするな。こうやってレッコするんだ。」俺が躊躇^{ちゅうちよ}しているのが解ったのか、何のためらいもなくきれいな海に生ごみや紙くずなどが混じるごみをレッコしたのだ。レッコ(Let Go)とは捨てるとか投げ入れるという意味である。



(大桟橋から眺める横浜市の風景)

何も考えないでおこう、そうしなければ仕事が前に進まない。俺はこれからそうする事に決めた。そう言えばトイレの汚物もそのまま海に垂れ流しだし、これは人間と言う進化を遂げた生き物の業なのだろう。しかし待てよ、俺と同じように思う人間が沢山いてもいい筈である。人間は、いろいろなものを発明し、我々の生活がどんどん便利になって来ている。それを作って儲けようとするのが人間の為せる技である。本来ならば作ったものをいかに処理して元に戻すかも同時に考えなければならない。それが人間が考えなければならない命題である筈だ。確かに革新的な新製品を作れば人々はその便利さを求めて我先に殺到し、企業は膨大な利益をつかむ。一方不必要になった製品などを処理するにはまた同じように膨大な費用が掛かるが、人間はそっちの方にお金をかけたがらない。しかし近い将来絶対に必要な技術である。これは、将来の産業に育ち、また多くの利益をもたらすだろう。そんな事を考えながら、シンク(Sink=流し台)に溜まった食器を洗っていた。あとはトイレを掃除して朝の仕事は終わりだ。俺もだんだん仕事のリズムを掴めてきたみたいである。

俺は艦のハンドレールに両肘をつき、太平洋と言う大海原の雄大な景色を見つめていた。

時間が経つのは早いものである。ギャレーではもう昼の用意をしている。

主調事が新米のオヤジにオムライスの作り方を教えている。凄、凄ではないか！フライパンに溶き卵を流し込み、その上に作っておいたチキンライスを盛り、そして右手に持ったフライパンの根元を左手の掌でトントンと叩いているうちに卵がチキンライスを包み込み、オムライスが出来上がっていくではないか。やっぱり違うなー。やっぱり出来る人間は簡単に、またスマートにやってしまうものである。出来ない連中は一生懸命にしているように見えて、たいした事も出来ないのである。この俺もその一人であるが・・・。

紀伊半島の潮岬を越した辺りから、初めて見るイルカの群れが本船の表の方へ向かって俺の前を横切っている。イルカって好奇心の強い動物なんだろう。これが自然なんだ。海って凄い。

昼食の片付けが終わって、相部屋に帰り、少し転寝をしたらどうか、もう3時半になっていた。今日の夕食はマグロと鯛の刺身、シジミの吸い物、マテ貝と分葱の酢味噌和えだ。久しぶりの和食である。主調時は大きな鯛の鱗取りをして3枚におろし、手際よく刺身にしてゆくのであるが、オヤジの方はと言えば、大根のかつら剥きに手こずっている。かつら剥きとは大根を約12～3センチに輪切りにした後、薄皮を剥き、後ろが透けて見えるような薄さに剥いていくのである。それを今度は刺身のつまとして千切

りにして刺身に添えるのである。

またキャロットを桜の形をした型抜きで抜き、その中心を起点として山形に一周ずつ薄く剥いてゆき、その上に練りワサビを練ったものを一人分ずつ載せるのである。まるで高級料理屋のようである。これは主調事のプライドなのだと思う。俺はと言えばもっとひどい。何も手伝えないのである。オヤジの事をへたくそと思っていながら、俺はそれ迄も行かないのである。



(型抜き用の型)

一通り盛り付けも終わって配膳しだすと、パーサー、セコンドッサー、セコンドエンジニアが次々とサロンルームに入ってきて、「今日は久しぶりのご馳走やな。」とか言いながら、モリモリと食べている。船員のほとんどが港育ちだからなのだろうか、食べている顔が違うのである。こうゆう時は皆が食べるのに夢中で、小言が無く俺も緊張しないで済むのである。

俺も一流レストランのウェーターみたいに各士官の^{いっきよしゅ}一挙手、^{いっとうそく}一投足を見ながら、士官にお茶を注いだり、灰皿を出したり、タバコにマッチで火を付けたりと、今まで自らした事も無い事をしている自分に気付いて、それが誇らしくなってきた。勿論俺は一流レストランなんかに行ったことも無いのであるが……。この時、またもや俺はたとえサロンを長く務めなくとも絶対に一流のサロンになろうと決心した。どんな仕事に就こうとも一流であろうと思う。

とうとう俺のスポーツマン ^{たましい}魂 に火がついた。

メスルームで食事を済まし、サロンルームの食器を片付け、相部屋に戻って風呂に入って普段着に着替え、又ブリッジに上がって行った。

「入っていいですか?」「おおサロンか、よう来たな。海はええやろ、俺なんかは有給休暇で家に帰るより、船に戻った時の方が落ち着くんや。おかしいもんやの。そりゃ一息子や娘に会いたいに決まっているんやが、細かい所に気を使わないけんから疲れてしまうんじゃ。あ、サロンいい事教えたろか。今横浜に向かっているんじゃが、行くときには^{はる}遥か沖を^{おか}通って横浜に向かうんじゃ。南に下るときはなるべく陸に近い所を通るんじゃ。それはな一、黒潮と言う海流が南の方から大体、4ノットぐらいのスピードで

銚子沖まで流れているんや。勿論本流の速さや。だけど陸に近かったらスピードが遅いんや。そやから今、陸が見えへんやろ。」

たまに行き交う船の光が見えるだけで陸の明かりが全く見えない所を本船はひたすら走っている。「サロン、前に見えるあの緑色の船はどっちの方へ行くかわかるか？船って言うものは夜に航海灯ちゅう物を付けないけんのや。一般的に大きな船は前部マスト灯、右舷灯、左舷灯、後部マスト灯、それから船尾灯や。ポートサイド(Port Side=左舷)が赤でスターボードサイド(Starboard Side=右舷)が緑と決められているんや。そやからあの船は右の方へ走ってるんや。解るか？」「そうなんや。そやから衝突を防げるんや。成程なあ。」「まあ、航海中やったら暇があるけん、教えたるからしよっちゅう来てもええけえ。」「有難うございます。」俺はますます船乗りにはまって行く自分が怖かった。「それからサロン、主調事に言ってチャンバーから氷を貰ってきてくれ。もうすぐワッチも終わりやから俺とこに持って来てくれ。」「はい分かりました。」

俺はすぐさま『CHIEF STEWARD』と鴨居に書いてある部屋に直行した。そしてその旨の事を主調事に話すと、「氷は、チャンバーにある氷を使って、アイスピック(Ice Pick=氷を割る為のキリ)でこのくらいの大きさに割ってこのアイス・ペール(Ice Pail=氷を入れる容器)に入れ、アイス・ Tong(Ice Tong=、氷を掴む氷バサミ)、マドラー(Cock Tail Stirrer=飲み物をかき混ぜる棒状の物)とウォーター・ピッチャー(Water Picher=水差し)に水を入れてトレイに乗付けて持って行け。



(Ice Pail)

それとこの新しいタンブラー(Tumbler=ガラスのコップ)も5～6個持って行け。あーそれから明日からは一寸ずつでもいいからオヤジがやっている盛り付けも手伝うようにしろ。」

主調事は、主調事のロッカーにしまってあったそれらを出して、水割りやオンザ・ロックの作り方を事細かく教えてくれた。主調事には船食がいつも自社に注文してもらおうと、色んな物を持って来るらしいのだ。

ちょっと待てよ、主調事は俺にアメリカ映画でたまに見るバーテンダーとしてチョッサーの部屋に持って行けと言ってるんだなあ、と確信した。これじゃー普段着は絶対にだめだなと思い、やはりサロンの制服に着替えて持って行く事にした。しかしこのサロン服じゃーな、とも思う。今度陸に上がったなら絶対カッコいいタキシードを買うぞ。そうそうサロン、その意気だ！俺は自分にそう言い聞かせた。

トン、トン、トン、チョッサーの部屋をノックした。これはアメリカンポップスの『Knock Three Times』と言う曲を思い出しての事である。

「サロン、どうしたんや、服まで着替えて。」「いやー、こうした方がバーに行ったように感じると思って。」「仕事が終わっているんやから気い使わなくてもええのに。」「この主調事はすぐに^{かつこう}恰好つけたがるからな。」

だけど俺はこの主調事のやり方が気に入っている。チョッサーは神戸で下船して帰って行った奥さんが持って来た『じゃこ天』を電熱器に網を載せ、あぶり始めた。そしておもむろに神戸で買った『ブラック・ニッカ』をロッカーから出してきてタンブラーに入れ始めようとするので、「俺がやります。」俺は主調事に教わった通りに、「水割りですか、それともオンザ・ロックですか？」「俺は水割りやな。」「ダブルですか、それともシングルですか。」「俺はダブルやな。」

「岸本さんは？」「おいおいサロンはバーテンでもしとったんか？^{すご}凄く気が付くやないか。俺は水割り、シングルでええわ。」「いやあ、こんな事をするのは初めてですわ。」チョッサーもコーター・マスターの岸本さんも不思議そうに俺を見ていた。

「それから主調事がこのセットをチョッサーにプレゼントしといてくれと言ってました。」とチョッサーに言うと、有難うと言っただけでさも当たり前のようにだった。

『じゃこ天』が^こ香ばしく焼けてきたのでパントリーに行ってペティナーナイフ(Paring Knife=日本ではペティナーナイフと言うが西洋では Paring Knife と言う皮をむいたりする小さなナイフの事である。

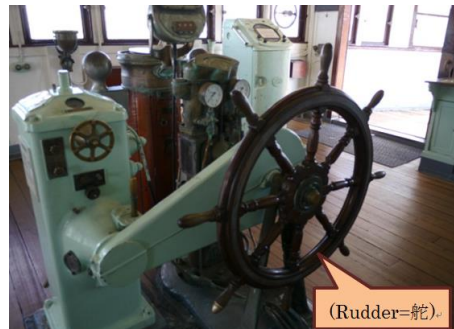
多分フランス語の小さいという意味の Peti から来ていると思う。パントリーからお皿を取ってきて『じゃこ天』を斜めに薄切りして皿の上に盛り付けた。



「サロン、なかなかやるやないか。」俺も少し有頂天^{うちょうてん}になってきた。

「サロンは山下さんの甥^{おい}やって聞いているけど、又なんでサロンになろうと思ったんや?」「おれ、船乗りが好きなんです。まあ何でもええから、先ず乗って、それから考えようっと思ってます。」ボースンに言われたように、海外で仕事をしたいとかは誰にも言わない事にした。「サロンはええ時に乗ってきたぜ。4月の海は風^なぎやから船乗りになるには丁度ええ時期に乗ったぜ。それに今^{いま}時の新造船は設備がどんどん良くな^よってきているからな。それとファックス^{もん}ちゅう物が出来たから新聞も見られるようになったし、本船はロランちゅう物^{もん}を使っているからいちいち六分儀で位置を測定せえへんかてええしな。六分儀はなあ、結構測定が難しんや。俺もあんまりうまいことないから、よう狂うんや。次の新造船はオメガ航法になるらしんや。俺も勉強せえへんかったらついて行かれへん。

しかし今でもチェーン式の大きなラダー(舵)を使っている船が結構あるんじゃが。」俺にはさっぱり解らない言葉が出てきた。最近の航法はどんどん変わってきており、このチョッサーも例外なく頭を痛めているようである。



(チェーン式のラダー)。

「サロン、これからは世の中がどんどん変わって行くぜ。サロンみたいなやつは船乗りで終わったらいけんぜ。俺らは漁師^{せがれ}の倅^{せがれ}やから田舎^くへ帰ったら食^くっていける。しかしサロンみたいに大阪生まれの奴は将来の事も考えないけんぜ。」「チョッサー、俺はまだ何も出来^でへんからサロンの仕事が出来^でるようになってから考えますわ。」

「そうか、サロンの叔父^{たば}さんは船員^{たば}たちを束ねてるから叔父さんに言えば海運関係の仕事なら何でも出来るのに。」「チョッサー、そうゆうのは止めて下さい。俺は俺、船乗りになったからには関係ないです。」「解った、そんでもお前は偉いやっちゃな。これから^やは氣い使わず、なんでもやらすで……。サロンも飲^のみんさいよ。ワッチが終わったら仕事は関係ないんや。」「有難うございます。」俺も自分のタンブラーに水割りを入れて飲み始めた。

「サロン、いけるやないか、これも遠慮^{やわたはま}せずに食え、俺は八幡浜^{やわたはま}に近い宇和島生まれやけど、魚はピカイチや。おいしいやろ。宇和島ちゅう所はみんな人情があるし、景色もいいし、最高やで。今度有給貰^{もら}ったら遊びに來たらええわ。こいつも宇和島生まれでいつも俺と同じ船に乗って來るんや。腐れ縁^{くさ}やな。なあ岸本。」「チョッサー、俺は何もチョッサーについて來てるわけやないのに……。たまたまこいつも同じ船になるだけ

ですわ。ほんまに困りもんですわ。小学校の時からチョッサーにしょっちゅう苛められ
てばかりいたけん、最初は嫌だったんですよ。ほんでも船に乗ったら結構可愛がってく
れるけん、今は他のチョッサーの下より楽しいですわ。」

そうこうしている内に時計は11時を指していた。「じゃーチョッサー失礼します。」
岸本さんは出ていった。「サロン、片付けなくてもええけん。明日の仕事があるから、
そのまま帰ってええから。」「有難うございます。」

俺も船に慣れてきたのか、今日は5時に目が覚め
た。ベーシン(Basin=洗面台)で顔を洗って、制服に
着替えてギャレーの方へ行き、サロンルームの朝食
のセットを終え、昨日主調事に言われた通りに盛り
付けの手伝いもするようになった。そしてメスルー
ムの配膳も手伝って、余裕で仕事が出来るようにな
った。要領さえ解ればこんなの大した事はない。サ
ロンルームで士官の食事が終わり、パントリーで食
器を洗っていると、ガー、ガーとカモメが本船の艦の
方で寄り添うように飛んでいるのに気付いた。カモ
メが飛んでくるというのは、陸が近いからである。



(Basin=洗面台)

遠くを見ると、陸がかすかに見えている。三浦半
島らしい。暫くして浦賀水道の手
前辺りで本船は、停船した。ポー
ト(Port=左舷)側のデッキを見ると60歳をはるかに過ぎた、パイ
ロットと思われるお爺さんが、ジ
ャコップをつたって本船に乗り
込んできた。ジャコップ(Jacobs
Ladder=足を載せるところは木、
又は金属でできており、その他は
縄で出来ている。)とは縄梯子の
事であり、お年寄りにとっては、
危険極まりないのではあるが、彼はパイロット・ボートから乗り移って来たのである。
その後、本船はついに横浜港へ向け走り出した。



(横浜港山下近くの静だまり)

しばらくすると、なんだこりゃー、瀬戸内でも見なかった沢山の数の船舶が航行しているではないか。さすが東京湾である。大方の船が東京湾を出てゆく場合は左側を航行し、入港してくる場合は、右側を走っているのである。

本船が横浜港に速度を落としながら向かっているのだが、急にスクリュウをアスターン(Astern=後進)にして止まり始めた。なんだ、岸壁に着かないではないか。

あとで判ったのだが、荷役が沖取りであり、本船は接岸せずにブイに繋いで荷役をすることになったのだ。横浜港では現在大掛りな本牧ふ頭を建設中で、他の岸壁がいっぱいなので接岸荷役が出来ないのだ。

本船がブイに繋がれると同時に、コーター・マスターによっておろされたタラップを伝って、サンパンからステベールを含む大勢の人が本船に乗り込んできた。

チョッサーから、「サロン、コーヒー4つ。」ここでも早速、代理店とステベールのフォーマン(Forman=荷役頭)がチョッサーの所に来て、荷役の打ち合わせだ。表ではステベールが既にポンツーンを開け、オンデッキに積み重ねている。なんと手際のいい事か。またどこからともなく、貨物を大量に積んだ5~6隻のバージ(Barge=舢舨)が本船に横付けされ始めた。そしてそれらのバージはすぐさまハッチカバーを取り、バージに積んである荷物を本船のディレック(Derrick Boom=貨物を吊り下げする時に本船のマストの根元付近から伸びている支え棒)で積み込み始めた。このような作業を舢舨取りと言うらしい。本船には、15トン吊りの、ディレックが3本ついて



(山下公園)



(Sampan=通船)



(在来船荷役)

いる。

チョッサーとフォーマンとの打ち合わせが終わり、チョッサーがパッセージ(本船内の通路)の黒板に『明後日 17 時荷役終了、18 時出航予定』と書き入れた。サンパン(Sanpan=通船^{おおさんぼし})は大栈橋へ 1 時間毎に往復することになっている。俺は金が無いので、どちらかと言えば早く出航して欲しいのだ。

しかしやっぱり 18 時のサンパンで出かけることにした。俺はこのような小さな船に乗る事自体初めてであり、なんだか遠くに来たんだと、次々とライトが点きはじめた周りの船を眺め感傷^{ひた}に^{おおさんぼし}浸りながら大栈橋に向かった。

大栈橋には大きな外国籍の客船が 2 隻止まっていた。そして俺たちがサンパンから降りると、そのゲートから俺たちの生活なんて全く解らないであろう金持ちらしいきれいな服装をした白人の客たちが、市街見物の為に一斉に豪華客船から吐き出されるように出て来た。

その人たちを尻目に俺は山下公園の方へぶらぶらと歩き出した。あった！これが有名なホテル、『ニューグランド』か。ここは幕末時代にあったフランスの旧海軍病院跡地に建て

られた『グランドホテル』が、大正 12 年 9 月 1 日、関東大震災で崩壊した^{のち}後、大正 15 年に建て替えられ、『ホテル、ニューグランド』として再開したのである。昔、赤木圭一郎や、石原裕次郎の映画で見た格式の高そうな建物そのままである。よし絶対ここでいつかは食事をしてやるぞ、と俺は自分に誓った。ここを通り過ぎて左を見るとライトアップされた氷川丸^{ひかわまる}がある。

1930 年(昭和 5 年)に建造され、神戸～シアトル間を皮切りに貨客船として名をはせた日本郵船所属の船である。やっぱり俺は船が好きなのである。係船されているとは言



(大栈橋)



(Hotel New Grand)

え、今にも出航しそうではないか。ここの氷川丸も要チェックで、そのうち是非お金を払って中に入ってみようと思った。そんなことを考えながら周りを見渡した。若いカップルばかりじゃないか。なぜか一人で歩いている俺が恥ずかしくなって来た。

【注】 ①氷川丸を見学するための入場料は大人200円、65歳以上は100円と凄く安かったのである。

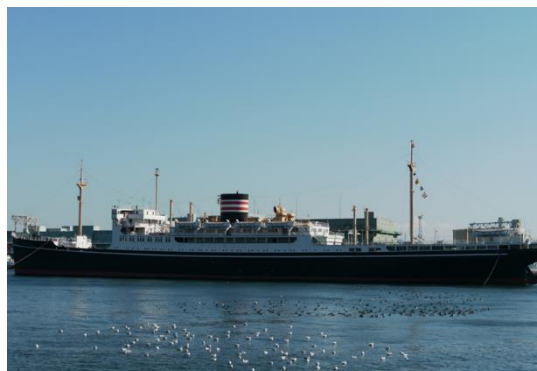
②大栈橋から、氷川丸の間にある山下公園は関東大震災で瓦礫の処理に困り、その瓦礫で作った埋め立て地である。

その後は横浜と言えば中華街と言うわけで中華街を覗くことにした。

何と、高いやないか！赤や緑や金で塗られた派手な建物の通りを歩いてゆくと、人通りは凄く多いのだが、どの店のメニューを見ても値段が高すぎて、金のない今の俺にはラーメン一杯も食べられやしない。ここで食べられる人たちは多分金持ちの人だろう。

確かに横浜の中華街の地域は広そうである。中華料理店と並んで、食材店や、月餅などを売っているお菓子屋、骨董品屋など様々な店が軒を連ねている。俺はちょっと小腹がすいたので、店頭で売っている肉饅頭を買って食べることにした。

値段は高いのだが、中に入っている肉がなんと豚肉なのだ。大阪では肉と言えば牛肉と決まっていて豚肉などあり得ない。豚肉の場合は、豚肉なのだ。大阪ではこれは豚饅頭であり、肉饅頭とは言わない。これらに比べ、大阪



(氷川丸)。



(山下公園に係船されている氷川丸)。



(元町)。



(中華街入口)。

の『5 5 1の蓬萊の豚饅』のなんと美味しいことか。『5 5 1の蓬萊の豚饅』はパン生地と、アンがうまく融合しているが、俺が食べた肉饅は二つに開いたら、アンが肉団子みたいに飛び出して来た。おれが買った店が悪かったのだろう。しかしこんなに有名な横浜中華街である。殆どの店が美味しい筈である。今度横浜に来るときは本船で夕食をとらずに一流の店を調べ、大枚をはたいて食べる事にしようと思う。

この日も11時のサンパンで帰ることにした。同乗したのは湯沢ボースン、根本ナンバン、ナンブツの西崎さんとワイパーの井上だった。俺以外は伊勢佐木町に有る『根岸屋』へ行って酒を飲んでみたいである。彼らが言うには本船(外航船)乗りで『根岸屋』を知らない奴はど素人だと言う事だ。ここも次に横浜へ来たときは是非寄って見なければならない。

今日は歩き疲れたので本船に戻って2段ベットの下の潜り込んだ。すると忽ちの中に強烈な睡魔に襲われてそのまま眠ってしまった。

『ウィーン』この音で今日も5時に起こされた。あと2日で横浜ともおさらばである。

俺の本来の持ち場ではない、メスルームの掃除も完璧に終えた後、サロンルームの掃除、テーブルの布巾掛け、朝食のセットを終え、ライス釜のスティームをひねった後、ギャレーで盛り付ける皿を用意して、オヤジがギャレーに来るのを待っていた。オヤジの機嫌があまり良くない。オヤジは今日、俺がすべてをセットして臚で平然と景色を眺めているので、自分の領分まで荒らされていると思っているのだろうか？新米の俺は自分の持ち場が未だはっきり解っていないので、トコトンやってやろうと思っている。俺はスポーツマンである。スタミナでは俺の



(天后宮)



(媽祖廟)



(関帝廟)



(中華街の目抜き通り)

右に出る者はいないと思っている。絶対に文句は言わせるものか。俺はその様に考えている。

一通り士官の朝食が終わり、俺も食事を終えて後片付けをし、トイレ掃除をしたあと、表の方を見れば、ギャングの交代時間の為に荷役がストップしている。ギャング(Gang)とは一組のステベアーを指す言葉でここではステベアーの意味である。本船では、デリックが三本あるから、三組と言う意味でスリーギャング(Three Gangs)である。つまりフルギャング(Full Gang)である。それらのボスがフォーマン(Foreman=頭)でありフォーマンがすべてのギャングを指揮するのである。彼らがオールナイト(オールナイ)で荷役をする場合は大体3交代制で、その間の区切りのいい時に、ちゃぶタイム(お茶を飲んで休憩すること)を取って、荷役の安全と効率化を図っている。

今日の昼食は、ロースト・チキン、サラダとポタージュ・スープである。本船のオープンは大きいので、ロースト・チキンなどは家族の分も合わせて、2回ぐらいで焼きあがり、それほど時間はかからないのであるが、チキンが冷凍なので、朝の早い時から、チャンバーから取り出して、自然解凍しているのである。主調事によれば、水とかお湯で解凍するよりは自然解凍の方が胡椒や塩の味がチキンになじみチキンの本来に近い味が出ると言う事らしい。

「サロン、コールスローを切って見ろ。」主調事が包丁など握ったことも無い俺に、長い西洋庖丁を渡した。コールスローとはキャベツの千切りの事である。俺は見よう見まねでキャベツを切り出した。しかし、包丁の刃が、キャベツから滑って、細く切れない。主調事がその包丁を取り上げ、そばにあった皿の裏を軽く庖丁で滑らして「これでやって見ろ。」と言って、又その包丁を俺に手渡し、おれはその庖丁で切ってみた。確かに、さっきと比べて格段に切れる。「サロン、これは切れるとは言わない、そこにある粗砥^{あらと}で砥いてみろ、「こうゆう風に、水を付けて、角度はこのぐらいに寝かせて裏を触って、ざらざらしてきたら、サーと引いてそれから仕上げ砥石や。同じようにして、砥いだ面が、鏡の様になったらひっくり返して、サーと引いて終わりや。これをお前にやるから、夕食が終わったら、必ず砥いて、乾拭き^{からぶ}して新聞紙に巻いておくんや。解ったな。」おっ、主調事が西洋庖丁を俺にくれたのだ。これは仕込みも手伝えと言う意味だな。ますます俺はやる気になってきた。俺はもう一度、キャベツに庖丁を入れた。へえー、こんなに違うのか。成程、『包丁は職人の魂』と言う意味が少しわかった気がする。

その後主調事が、コールスローを自ら切って庖丁の使い方を教えてくれた。

商船乗りの食事は普段俺達が食べている食事と違って本当に贅沢^{ぜいたく}この上ないもので

ある。^{おか}陸にいる人のどれだけの人が、これだけの食事を食べられよう。

昼食のセットが
終わり、いつものよ
うにサロンルーム
に立った。荷役中は、
みな食事を終えた



ワイヤー・スリング(WIRE SLING)

らさっさと部屋へ帰ったり持ち場に戻
って行く。ワッチの時間も、貸し借り
して、いつもより長くする人や、短く
する人もいてそれぞれである。近くの
親戚の所に行く人や、どうしてもものっ
びきならない事情がある場合はワッチ
の融通をするのだ。だから彼らの荷役
中の、昼食時間も短く、俺の仕事もさ
ほど苦にならない。昼食の片付けが終
わってから、またぞろハウス(House=
船室)前のウィンチ・テーブル(Winch
Table=ウインチがあるデッキ)から本
船の荷役を眺めていた。彼らは単に積
み込むだけでなく、積んだ貨物が動
かないように、滑らないようにベニヤ
板を敷たり、材木で支えたり、太いワ
イヤーで縛ったりしながら積み込ん
でいるのである。この様な材木やベニ
ヤ板の事を(Dunnage=荷敷板、つか
い棒等)、又ワイヤーや貨物を固定する



シャックル (SHACKLE)



クリップ (CLIP)

資材の事をラッシン
グ・マテリアル
(Lashing Materials=
ワイヤー、クリップ、
ターンバックル、シャ
ックル等)と言うらし



ターンバックル (TURN BACKLE)

い。神戸でもそうだったように、ステベールの中で、怠けたりふざけたりしている者は全くいない。船積みと言うものは聞くと見るとでは大違いであり、我々が考えるように簡単ではないと思った。俺も自分の仕事に誇りを持つと思う。

よく世間では何も出来ない人間程、格好^{かつこう}いい仕事をしたが、どんな仕事でも誇りを持って仕事をしている人間の方がどれだけ格好^{かつこう}いい事か。

そうしている内に、船食(船で消費する食料品を専門で扱う会社)が食材を積み込みに来たので主調事が、注文の品が納品されているかをチェックしながら、乾物ストアとチャンバーに米や小麦粉、肉、魚介類、野菜等の食材を入れさせている。俺もすぐにオヤジと一緒に手伝うことにした。一方デッキやエンジンの方でも船具屋が船用品の積み込みに来ている。船食も船具屋(船で使う消耗品や機材を専門に扱う会社)も英語ではどちらも(Ship's Chandler)と言うらしい。

今日の夕食はビーフ・ステーキ。大きなロースの塊^{かたまり}をオヤジがチャンバーから担いで上がってきたのだが、その大きな塊は20キロ以上はあろうかと言う代物^{しろもの}で、それを、オヤジがひとりあたり、250グラムずつに位に切り分けている。それを主調事が塩と胡椒で味付けした後、フライパンで中火で暫く焼^{しばら}き、そのあと強火にし、どうゆう銘柄か判らないが、舶来のブランディーでフランベ(Flambe <仏> =最後の香りづけの為にアルコール度数の高い酒を入れ一気にアルコールを飛ばす)し、炎がパッと立ち上がった。格好いいではないか。主調事は、ギャレーに立つときは必ず、綺麗に洗^{のり}って糊をきかせた真っ白のダブルのシェフジャケットとエプロン、シェフハットを身に着けている。それに引き換えオヤジはいつも安物の中華料理屋のコックみたいに薄汚れたコックコートを着て、それを別に気も留めていないようである。この主調事は料理と言うものは、見た目、色目を大事にしろと言う。俺も大賛成である。

俺も今日から、コールスローの担当になった。少しこの千切りの太さにばらつきがあり遅いのだが、何とかこなす事が出来るようになった。

夕食の片付けが終わり、風呂に入ったのだが、彼女にもらった『桃の花』を毎日つけているせいか手の皸^{あかぎれ}やひび割れがだんだん治ってきている。今日はどこも行かないぞと決めていたので、普段着に着替えて表の荷役をまた見ることにした。

今は横浜港に貨物が集中し、ステベールにとっては土曜日も日曜日も昼も夜も全くない状態が続いている。早く、本牧ふ頭が完成して、荷役効率が良くならなければパンクするのは目に見えている。最近の新聞を見ると、欧米ではコンテナ船がどんどん建造されており、将来は雑貨のほとんどがコンテナ輸送になるとの事である。今積んでいる段ボールや、小さなケースがコンテナ輸送に変わるだけでもすごい効率化と合理化が図られ

と思うのだ。

ステベが8時のちゃぶタイムに入ったので、メスルームにいるだろうセーラーの谷本の顔を拝みに行くことにした。谷本は船員仲間から、「谷っ」って呼ばれているので最近俺も谷と呼ぶようにしている。谷はさすがに懲りたのかは、昨日も^{おか}陸には上がらなかったようだ。同僚の山本には、今度の給料でお金を返すらしい。

船乗りには、船乗りを楽しむ者と、生活の為に船乗りになっている者とのどうも二種類あるみたいだ。

谷はもちろん前者の方だが、お金を使い果たし、本船に乗ったばかりで、まだ給料を^{もら}貰っていないから、相当落ち込んでいる。「谷っ！落ち込むなよ。俺も一緒に飲むから、飲もうぜ。」「ああ、いいよ。」俺は氷を取りに、チャンバーに行ったつ

いでになけなしのお金で昨日買ってきた『ブラック・ニッカ』を相部屋から持って来て一緒に飲むことにした。谷はこれでも仕事の面ではボースンの評価は高いのだ。体が俺と同じぐらいデカく、動作が速い反面おっちょこちょいなところもあるが、デッキの仕事をさせば、言う事が無いぐらいテキパキとやるらしい。「谷、俺がつき合うさかい飲もうぜ、谷、元気出せよ！」「俺は大丈夫だぜ、ただ金が無いから外に行かないだけの事よ。」「ほんなら、俺と一緒にやの一。谷は有給中は何してた？」「ま、魚を釣ったり、夜は近所のスナックかいのう。」「どっかに遊びに行けへんかったんか？親や兄弟はどうしてるんや？」「親父は機帆船に乗っているけん、居てたり居てへんかったりしてるし、おふくろは、スナックで働いてるからな。妹も高校に行ってるからな。大体船乗りの有給休暇で言ったらそんなもんやで……。そやからわしは船に乗ってる時の方がええんや。」「サロンは有給休暇を^{もら}貰ったらどうするんや？」「どうするって言うても俺はまだ乗ったばかりやからな。」「サロン、休みが一か月もあつたら、何をしてええか分かれへんぞ。友達の仕事をしているし、何処かに行くのも面倒くさいし、魚を釣ってるの



(倉庫に入れられているケース物)。



(紙パルプをロールにした物)。

が関の山や。」「ガール・フレンドは居てへんのか。」「居てないことも無いけど、一寸でも近所の女と一緒にいたら噂になるし、田舎臭い奴ばかりやし。」「そうか、そうやな、俺は居てへん事ないけど、まだ俺はペイペイやし、甲斐性が無いからな。」「サロン、台湾に行ったら遊びんさいよ。別嬪ばかりやで。スタイルも日本人と違くて、足が長ごうてお尻がキュッと上がってて恰好ええ子ばかりやで。」「そうかー、俺は台湾は初めてやから町をブラブラするわ。」

この様なたわいもない話に明け暮れているうちに酔いも回ってきて、俺は寝ることにした。

最近、船員生活も慣れてきたせいか、朝の五時半には起きられるようになった。ウインチの音も気にならないし、お酒は、人生の悩みなんかを掻き消してくれるので、一番の薬である。

今日もオヤジより早く起きて、すべてをセットして、オヤジの来るのを待つことにした。オヤジは昨日ステーキ用に使った解凍された冷凍のロース肉と、サバの干物をチャンバーから持ってあがってきた。そして、俺に「サロン、オニオン10個と、キャロット5本、ピーマン10個、キャベツ2個を持って来てくれ。」と言う。今日の昼食はスパゲッティー・ミート・ソースである。これは明らかにオヤジの仕事である。まあいいや、こうしている内にオヤジの仕事が無くなるだけだから。「はい、解りました。」すぐさまチャンバーから持って来た後、今日の朝食のサバの干物と大根おろし、生卵、味付け海苔、納豆の配膳が終わり、豆腐と薄揚げ、ワカメの入った味噌汁を保存容器に入れ、スティームの炊飯器からご飯を保存容器に入れようとした時、ちょうど主調事がミート・ミンサー(Meat Mincer=挽肉機)を持ってギャレーに入ってきた。「これを取り付けておくから挽肉を作るときはこれを使うように。それからサロン、これからは飯釜のおこげはこのビニール袋に入れてチャンバーに入れておくように。船食がなあ、おこげの菓子を作っている会社から頼まれて、次の航海で買い取ってくれるらしいのや。何が金に成るか解らんのお。頼むぜ。」

士官の食事の片付けが終わって、今度はみじん切りに取り組むことになった。主調事が皮を剥き両端を取ったオニオンを上から半分に切り、切った面を下にして根っこの部分の手前まで縦に細く切れ目を入れ、それを直角に薄くスライスした。そうすると、オニオンのみじん切りとなるのだ。キャロ



ミート・ミンサー

ットは、皮を剥いた後、斜めに薄くスライスした後それを千切りにして、又直角に細かく刻んでゆくのである。この様に主調事は俺たちに丁寧に教えてくれた。俺も昨夜丁寧に砥いだ庖丁で遅いながらもだんだんと慣れてきたので、オヤジと二人であつという間に仕込み終わった。

そしてその後デッキの方に行ってみると、一番ホールドは荷役を終え、ハッチをポンツーンで蓋^{ふた}をして、その上にハッチカバーをかけている。二番ホールドと三番ホールドも、もうすぐ終わりそうである。暫くして、ギャレーに戻ると、オヤジはミート・ミンサーで挽肉^{ひきにく}を作っている。



(Hold=船倉)

「サロン、フレンチ・ドレッシングの作り方を教えてやるからよおーく見とけよ。まず二杯酢を作って、これにホワイト・ペッパーと、塩、味の素、サラダ・オイルを入れ、ハンド・ミキサーでよおーく掻き回すんや。塩はあんまり入れるなよ。どうや、簡単やろ。サロン、レタスとセロリを取ってこい。それと、サクランボの缶詰。今日のサラダはさらし玉葱にレタスとセロリとキャロットの千切り、それをフレンチ・ドレッシングで和えるんや。その上に、パセリとサクランボを添えて出す。」二杯酢とはお酢に砂糖を入れた甘酢で、三杯酢とはさらに醤油を加えたものである。主調事は大きなフライパンにサラダ・オイルを入れ、挽肉、キャロットとオニオンと、ガーリックのみじん切りを炒めながら、塩、胡椒、ナツメグを振り掛け、ケチャップを入れて簡単に、ミート・ソースを作ってしまった。同時にスパゲッティも既にボイルしており、コンソメ・スープも出来上がっている。

サロンには久しぶりに局長が戻ってきている。局長の仕事は、港内に入ると全くないので、いつも何処かに行っているのである。パーサーも戻って来ている。いよいよ今夜は出航である。荷役中が一番忙しい、チョッサーは食事の後はさっさとチョッサーの部屋に入って行った。キャプテン、チェンジャー、他のオッサー、エンジャーもサロンルームが、結構忙しくなるので、食事の後はすぐに自分の持ち場や、部屋に帰って行ったのだ。

パーサーは俺が今まで見たことも無いような大きなタイプライターを、サロンの側にある客間に持って来て、何やら打っている。またその側には機械式の計算機を置いている。多分、パーサーは算盤が出来ない



ようである。

「サロン、コーヒー三つ。」チョッサーからまた声がかかった。コーヒーを持ってチョッサーの部屋に行くと、何やらたくさんの書類にサインをしている。

あとで聞いた話によると、メーツ・レシート(Mates Receipt=本船船積証明書)と言って貨物を確かに受け取って船積したという書類にサインをしているとの事だった。メーツとは航海士の事である。荷役はほぼ終わり、ラッシング(Lashing=ワイヤー等で貨物が動かないように固定すること。)の作業に入っていた。

暫くして例の物々しい制服を着た、税関の人たちが来て、サロンでは、チョッサーと、パーサーが応対していた。その後はイミグレ(Immigration Officer=移民官)が来てチョッサーがサインをしていた。サロンと言う仕事は、だれが何をやっているかと言う事が一番わかる仕事である。このような一連の作業を海運業界では手仕舞い^{てしま}と言う。

今日の夕食は、内地最後と言う事で、やはり新鮮な刺身である。しかし皆は、食事をするや否や、持ち場に帰って行った。俺もはやばやと、食後の片付けを終わり、風呂に入ることにした。「うっそー。」風呂のお湯がもう海水になっている。風呂から上がって普段着に着替えて、デッキの方を見ると、みんなスタンバイをしている。本船の側にパイロット・ボートが横付けされ、パイロットが乗船してブリッジの方に上がって行った。いよいよである。フル・アスターン（全速後進）となり、本船は動き出した。暫くして艫^{とも}の方から泡が立ち、本船は時計回りに回り、浦賀水道目指して動き出した。そして三浦半島近くでまた本船が止まり、パイロットが下船した。

本船は初めての外地、台湾に向けてフル・アヘッド、前進全速……。次は基隆である。